

人類生態班 B

ラオス・ラハナム地域の食環境に関する人類学的研究
岩佐光広（千葉大学大学院社会文化科学研究科博士課程）
門司和彦（長崎大学熱帯医学研究所）
武井秀夫（千葉大学文学部）
小谷真吾（千葉大学文学部）

キーワード：ラオス、食物摂取、カエル、漁撈、栄養転換
調査期間・場所：2004年8月－12月（5ヶ月間）
ラオス、サワンナケット県、ソンコン郡、ラハナム地域南部

Anthropological Study of the Relation between Food Consumption and Environment in Lahanam, Lao PDR

Iwasa, Mitsuhiro (Ph.D. Candidate, Graduate School of Social Sciences and Humanities, Chiba University)
Kazuhiro Moji (Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University)
Hideo Takei (Faculty of Letters, Chiba University)
Shingo Odani (Faculty of Letters, Chiba University)

Key Words: Lao PDR, Food consumption, Frog, Fishing, Nutritional transition

要旨：本研究は、ラオス人民民主共和国ラハナム地域において、1) 食事調査から現在の食環境、2) インタビュー調査から過去50年の食環境の変容、を分析することにより、食環境の変化と要因を考察することを目的とした。食事調査の結果、魚介類とカエルが頻繁に摂取されていることが分かった。また食物の入手方法の割合を分析した結果、全食品の内8割近くが購入以外の手段で入手されていることが分かった。インタビューの結果、殆どのインフォーマントが「今も昔も同じ食事をしている」と答えたが、一方で、入手方法や消費量は変化していると回答した。特に、カエル摂取量の増加は、当地域における陸水漁撈の変容に影響されていると考察される。

1. 概要

本研究は、ラオス人民民主共和国（以下ラオス）、ラハナム地域の食環境の変化とその要因を、特に経済的側面に注目しながら分析し、ラオスにおける栄養転換の理解に貢献することを目指すものである。本研究では、本プロジェクトにおいて設定している1945年から2010年という時間軸にもとづき、

- (1) 食事調査から現在の食環境の把握
- (2) インタビュー調査から過去50年の食環境の変容過程の分析を行なった。



2. 調査(1)：食事調査

*対象:

高齢者（60 歳以上）が属する 14 世帯
33 日間、計 85 回の食事を観察

*方法:

直接観察による食事記録法

*考察:

表 1 は、観察した食事のうち肉類、魚類、カエルの観察頻度をまとめたものである。肉類（21%）以上に魚類（39%）とカエル（34%）が頻繁に食べられていることが分かる。ここから、村の人々は動物性たんぱく質を主に魚類とカエルから得ていると言える。とくにカエルは、雨季だけでなく乾季でも重要な食料として利用されていた。



Table 1: Frequency of observing meet, fish and frog

| Grouping | NO. OF MEAL OBSERVATED | NO. OF OBSERVATION / 1MEAL |
|----------|------------------------|----------------------------|
| Meat | 18 | 0.21 |
| fish | 33 | 0.39 |
| frog | 29 | 0.34 |



表 2 は観察された食物の入手方法（自給、購入、その他）の割合を示したものである。全食品のうち 8 割近くを購入以外の手段で入手していることが分かった。それぞれの食品群ごとの購入の割合を見てみると、調味料だけが低い割合（80%弱）で購入されており、それ以外のほとんどの食品群は 2 割に満たない。ここから、栄養素を供給する食品の多くは、購入されるのではなく、農業や漁業、採集狩猟によって得られていると言える。

Table 2: Way of getting each grouping food

| GROUPING | n | Sources of Foods | | |
|--------------|--------------|------------------|-------------|------------|
| | | Self-Sustenance | Buy | others |
| Grains | 95 | 89.4 | 8.1 | 2.5 |
| Bean | 31 | 90.3 | 9.7 | |
| Meat & Fish | 115 | 71.3 | 26.1 | 2.6 |
| Vegetables | 183 | 93.4 | 6.0 | 0.6 |
| Seasonings | 368 | 27.4 | 72.6 | |
| Spices | 192 | 89.1 | 10.9 | |
| Fruit | 27 | 92.6 | 7.4 | |
| Total | 1,011 | 79.1 | 20.1 | 1.9 |

以上の知見から、当該地域の食環境は「伝統的な」食環境を維持していると見ることができる。

3. 調査 (2): インタビュー調査

*対象:

高齢者（60 歳以上）とその世帯の各世代の構成員（計 24 世帯）

*方法:

インフォーマル・インタビュー：ラハナム地域内で生業活動や食事の参与観察を行い、その場で随時インタビューを実施した。

フォーマル・インタビュー：各世帯を訪問して半-構造的インタビュー（semi-structured interview）を行った。

1980年代以前は魚がたくさんいたため、特にカエルを食べなくても十分な量の食料を確保できた。だが1980年代以降、生態・社会環境の変化にともない魚量が減少し、漁撈だけで全世帯構成員を養うだけの食料を得ることは難しくなった。その不足分を補うために、現在でも容易に捕まえることができるカエルを食べる機会が増加した。加えて魚量の減少に伴い、魚に商品価値が生まれ、その売買が活性化したという経済的側面での変化が、カエル食の機会の増大を補強しているのである。

4. 結論

食事調査においては「伝統的」な食環境を維持していると考えられるが、聞き取り調査においては生態・社会環境の変化、経済的变化に伴い当該地域の食環境が変化してきたことがわかる。現在の食環境は結果としては「購入」に依存する「近代的」な食環境ではないが、その変化の過程において近代化、市場経済の影響を見て取ることができる。

こうした社会環境の変化を考慮したとき、なんらかの形で栄養面での転換に関連していると考えられる。今後、栄養学的側面、アンソロポメトリーなどのデータと関連付けていくことで、より詳細な分析が可能となるだろう。

